

Mary Barton as a Tale of Manchester Life, Not of John Barton¹

大野 龍 浩

1. 客観批評

文学批評の目的のひとつに、「作者の意図をさぐる」というのがあります。この立場には賛否両論があります。最近の批評界の動向としては、否定的な見解の人が多いようです。作品を解釈する際に、「作者の意図」などというつかみどころのないものを探るよりも、読者の創造的 (creative) な読みを重視するのです。最近OxfordからManchesterに転勤した文学批評家Terry Eagletonは、否定派のひとりです。いっぽう、肯定的な立場には、Virginia大学名誉教授のE. D. Hirsch, Jr.がいます。彼は「文学批評の基準は作者の意図をさぐる」と断言しています。引用したのは、EagletonがHirschの理論を要約している部分です。「もし作者の意味するところに敬意が払われなければ、解釈の基準がなくなってしまい、批評の乱立を招くだけである。」²

わたしはHirschの意見に共感します。文学作品の解釈には答えはひとつではない、というのはわかります。しかし、その結果、何百という解釈が産まれ、それぞれに共感する人と反発する人を生じさせたあと、やがては忘れ去られていきます。わたしはそんな批評はしたくない。ある程度時代の流れに耐えるような批評がしたい。そのためには、普遍的な課題である「作者の意図」をさぐるしかない。しかも、主観的に探ったのでは意味がない。「作者の意図」を客観的に証明してこそ、その批評は時代の流れに耐えるはず……。というわけで、本稿の目的は、「Mary BartonにこめられたGaskellの意図を客観的に理解すること」とします。

その目的を達成するために、もっとも有効な方法は、作品の構造に着目することです。作者は主題をできるだけ効果的に伝えるために、時間、場所、登場人物などを巧みに設定します。ですから、そのような構造上の諸要素を分析すれば、作者が何に重きを置いて物語を書いたのかが、明らかになるはずで

方法論の具体的モデルは、C. P. SangerとKarl Kroeberによる構造分析です。“The Structure of *Wuthering Heights*”という論文のなかで、Sangerは、作品中の時間データに着目して作品の年代記を作成し、Earnshaw家とLinton家の登場人物が三代に渡って対称的（symmetrical）に配置されていることを明らかにしました。ここにち大概の版の『嵐が丘』に付されているあの系図は、Sangerの発見を元にしたものです。一方、Kroeberは、Jane Austen、Charlotte BrontëそしてGeorge Eliotによる計17編の小説について、作中人物の登場頻度を頁ごとに調査することによって、各々の文体上の特徴や作法上の相違を明らかにしようとしました。

以下、この二人の方法を援用して、*Mary Barton*の構造を分析し、作者の意図を明らかにしたいと思います。

2．構造分析

まず、*Mary Barton*の主題をめぐる、対照的（contrastive）な解釈を紹介します。

Essentially, the narrative is a drama of working-class radicalisation and its consequences, both personal and social. (Daly xxiii)

[T]he novel concerns itself from the very first with the public role of women, especially but not exclusively Mary's role. (Nord 154)

上段は、John Bartonが物語の中心、つまり労使間の社会問題が小説の主要な話題とする解釈です。下段は、Johnの娘Maryが焦点、つまり女性の自立が物語の主題とする解釈です。Dalyの主張も、Nordの主張も、論旨は一貫していて説得力はあるのですが、「作者の意図」を謙虚に探った結果至った解釈というよりは、批評家の主観的な関心で作品を切った結果至った解釈である感は否めません。作品の構造にほとんど注意が払われていないからです。

そこで、SangerとKroeberの方法を援用して、*Mary Barton*の時間の流れと作中人物の登場頻度を分析してみました。その結果を報告する前に、元となるデー

タをどのようにして得たかを説明します。

まず、「総合年代記」(Comprehensive Chronology)を作ります。作品中の時間データを基に、物語を場面に分け、その場面ごとに各々の登場人物が実際に登場している(active)か、それとも他の人物または語り手によって言及されるだけ(referred)か、あるいは登場も言及もないかを調べたものです。さらに、場面の長さを半頁単位の頁数で表すことによって、その場面が小説全体のなかで何パーセントを占めるかもわかるようにしています。この表によりますと、*Mary Barton*は、1834年5月から1842/43年までの約9年間で147場面によって扱っていることが明らかになります。³

さて、それでは、構造分析の結果を紹介します。まず、作中人物の登場頻度について。

Figure 1: Characters' Frequency of Appearance in *Mary Barton*

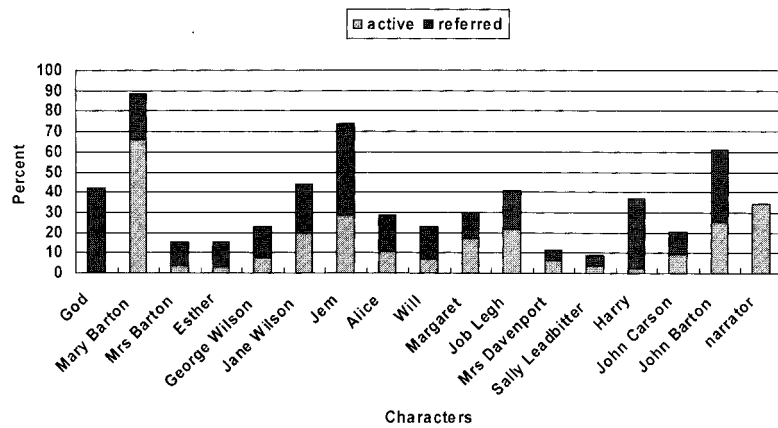
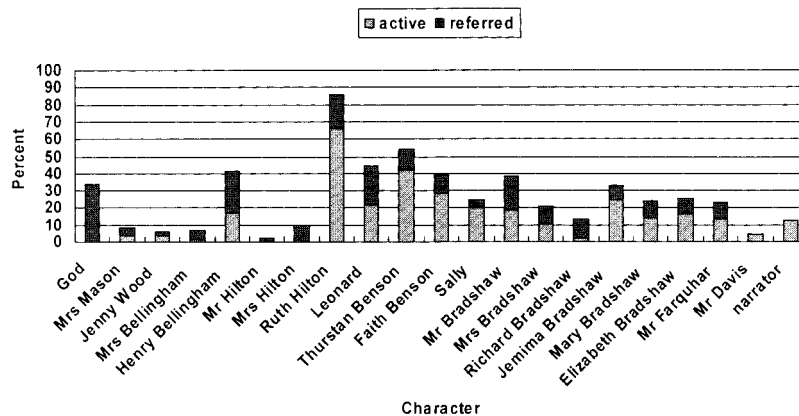


Figure 1はComprehensive Chronologyによって得たデータを基に、各人物がactiveまたはreferredであった場面のパーセンテージを合計して、棒グラフにしたものです。これによりますと、最も多く登場しているのは、Mary (active=66%; referred=22.4%; total=88.4%)であることがはっきりします。二番

目に多く登場するのは、彼女の恋人でのちに夫となる Jem Wilson (active=28.6%; referred=45.6%; total=74.1%) です。John Bartonは三番目で、active=25.2%; referred=36.1%; total=61.2%です。この結果から判断すると、物語の焦点はJohnをめぐる労働問題よりも、Maryとその恋愛の成就にある、と考える方が自然な気がします。

みなさんのなかには、「最も多く登場する人物が物語の主人公とは限らないではないか」と、この分析結果をいふかられる向きもあるかと思います。確かにその可能性は否定できません。実際、Kroeberの調査によると、彼が分析の対象とした17編の小説中、3編において例外が発生しています。たとえば、*Shirley*の場合、“Shirley Keeldar appears 40 percent of the total pages, while Caroline Helstone 53”ですし、*Felix Holt*においては、“Felix 26 percent, whereas Esther Lyon 35”です(231-34)。ただ、Kroeberは、ある頁にある人物が一度でも登場していればcountする、というやり方を取っていますので、精度が低い嫌いがあります。そこで、くだんのComprehensive Chronologyの方法によって、Gaskellの社会問題小説と一般的に言われています*Ruth*と*North and South*について、作

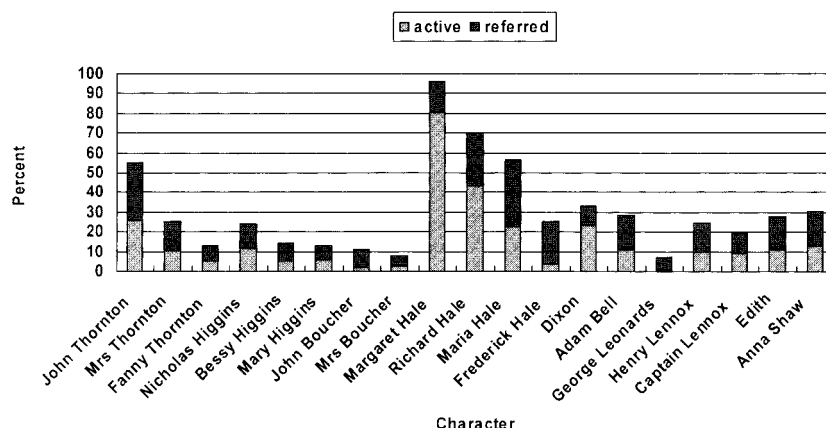
Figure 2: Characters' Frequency of Appearance in *Ruth*



中人物の登場頻度を調べてみました。

Figure 2はRuthについて分析した結果ですが、さて、一番登場頻度が多い人物は誰でしょう？ Ruth (active=66.4%; referred=19.1%; total=85.5%) です。ちなみに、二番目に多いのは誰でしょう？ Benson 牧師 (active=41.9%;

Figure 3: Characters' Frequency of Appearance in *North and South*



referred=12.4%; total=54.4%) です。三番目はLeonard (active=22%; referred=22.4%; total=44.4%) です。

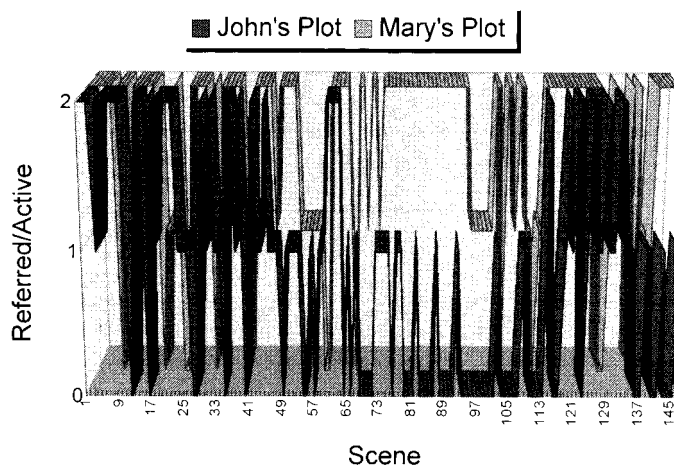
つぎに、*North and South*の場合はどうでしょう？一番登場頻度が多いのは？ Margaret Hale (active=80.2%; referred=16.2%; total=96.4%) です。ちなみに、二番目は？工場主で後にMargaretの夫となるJohn Thornton？じつは、Margaretの父Richard Hale (active=43.7%; referred=26.3%; total=70.1%) です。三番目こそJohn Thornton？じつは、Margaretの母Maria Hale (active=22.8%; referred=33.5%; total=56.3%) です。Thorntonは四番目で、active=26.7%; referred=29.3%; total=55.1%です。この結果から、*North and South*を、Thorntonが労働者に同情を示していく過程を追った社会問題小説とみなす解釈には、疑念を呈せざるを得ないのですが、この問題はSymposiumの論題と離れますので、ここでは触れません。ここではっきりさせておきたいのは、「Gaskell

の小説においては、最も多く登場する人物が主人公である可能性が高い」ということです。

作中人物の登場頻度の調査結果から、作品の焦点がJohnではなくMaryにあることが示唆されました。その信憑性を調べるために、こんどは二人をめぐる筋の流れを図表化してみました。

Figure 4は、JohnとMaryについて、場面ごとに、activeであれば2 points、

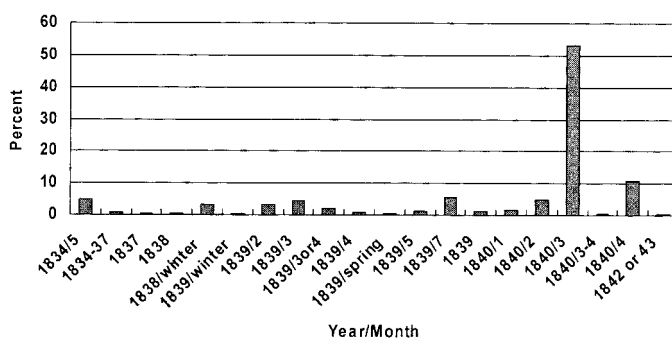
Figure 4: Plot Flow in *Mary Barton*



referredであれば1 point、まったく登場しなければ0 pointを便宜上与え、全147場面について調べることによって、二人に関する筋の流れを視覚化したものです。

これによりますと、John Bartonは、労働組合の用事でGlasgowにでかけてから（Scene 61/62）10日後にManchesterに戻ったのをJemに目撃されるまで（Scene 114）物語の表舞台から姿を消しているのがよくわかります。いっぽう、Maryのほうは、この間はもちろん、最初から最後まで途切れることなくactiveです（批評家の中には、「Maryは後半からしか活躍しない」と言う人がありますが、⁴ その人たちは構造上の裏づけない発言をしていることになります）。いづ

Figure 5: Monthly Sequence in *Mary Barton*

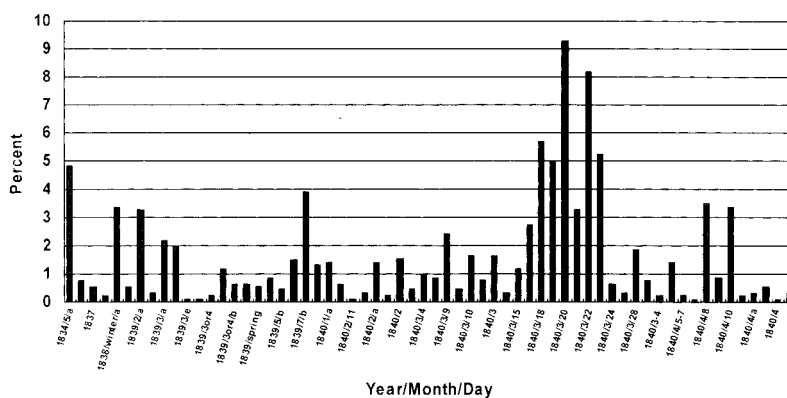


れにせよ、筋の流れを視覚化した結果も、作品の焦点がMaryにある可能性を示しています。

さらに、別の角度から、この仮説の信憑性を調べてみましょう。時間の流れです。

Figure 5は、Comprehensive Chronologyを軸に、場面のパーセンテージを月ごとにまとめたものです。これによりますと、1840年3月の描写が小説の半分以上(53.19%)を占めているのがわかります。いったい、この月には何が描かれているのでしょうか？

Figure 6: Daily Sequence in *Mary Barton*



それを説明するには、もう少し細かく時間の流れを区切ったほうがわかりやすいので、さきほど同様の仕方で、場面のパーセンテージを日ごとにまとめてみました (Figure 6)

これによりますと、最も多く頁数が割り当てられているのが、1840年3月20日で、9.26%です。この日に起こったことは、6年ぶりに再会した叔母のEstherの情報から、Harry Carson殺害の真犯人が父のJohnであることを察知したMaryが、殺人容疑で逮捕されたJemの無実を証明するための方法を模索し始める、というものです。二番目に多く頁数が割り当てられているのは、翌々日の1840年3月22日 (8.19%) です。この日には、MaryがLiverpoolを訪ね、Jemの無実を証明してくれるはずのWill Wilsonにやっとの思いで用件を伝えた後、老船乗りのSturgis宅に宿を借りるまでが描かれています。三番目は同年年3月18日 (5.66%) で、Willの旅立ち、Johnの出立、Alice Wilsonの容態の急変、そしてHarryの遺体のCarson家への搬入が描かれます。四番目は1840年3月23日 (5.23%)。Jemの裁判と無罪判決が主として扱われます。五番目は3月19日 (5.01%) で、Harryが殺害されたこととJemが逮捕されたことをMaryが知る場面。要するに、頁数が多く割かれている1840年3月18日から23日までの6日間の中心的な話題は、Jemを救うためのMaryの尽力です。

したがって、時間の流れの分析からも、物語の焦点がMaryにあることが裏づけられることになります。

3. 作者の告白

以上考察してきましたように、作品の構造を調べる限り、物語の焦点はMaryにあるように思われます。そうしますと、よく引用されます、「Johnこそが中心人物」という作者の告白をどう解釈したらいいのでしょうか？

‘John Barton’ was the original title. [...] Round the character of John Barton all the others formed themselves; he was my hero, *the* person with whom all

my sympathies went, with whom I tried to identify myself at the time [of writing]. (*Letters* 74)

結論を先に言いますと、この告白は額面どおりに受け取れない、ということになります。この告白は、「*Mary Barton*に描かれているほど、工場主は労働者に対して冷酷ではない」とするW. R. Gregの批評に対する弁明としてなされた経緯があるため、労使対立の部分にのみ焦点を当てた見解になっている可能性が大きいです。つまり、小説のなかで言いたいことがA、B、Cとあったとして、Bについて批判されたので、その点について反論したわけです。批判されなかったA、Cについては触れていないのです。それに、「文学批評の主体はあくまでテキストであり、作者の主観的な見解は、テキストにこめられた意図とはかならずしも一致しない」とするHirschの主張に、⁵ わたしは共感します。

Eassonは述べています、「出版後、『もともとのタイトルはJohn Bartonだった』とGaskellは述べているけれども、その前から考えられていた副題が示唆しているように、Maryの愛とManchesterの市井の人々の生活とは、つねに彼女の創作上の意図の中心的なものであった」と。⁶

結論として言えることは、構造的な裏づけをとってみる限り、「作品の焦点はJohnにではなくMaryにある」というEassonの主張が正しく、*Mary Barton: A Tale of Manchester Life*というタイトルは、作品の内容と構造をじつに忠実に表現したものだ、ということになります。

注

1. 本稿は2002年10月6日に大手前大学で開催された日本ギaskell協会第14回大会のシンポジウム「『メアリ・バートン』再読」のために用意した原稿を推敲したものである。
2. “if we do not choose to respect the author’s meaning then we have no ‘norm’ of interpretation, and risk opening the floodgates to critical anarchy” (60).
3. 与えられた紙面の都合上、Comprehensive Chronologyを挿入することは控える。実物は、拙稿 “Is *Mary Barton* an Industrial Novel?” *The Gaskell Society Journal*

15 (2001): 14-20. を参照されたい。

4. たとえば、“Although the title directs that Mary should bear the responsibility of the central figure, she does not step forward in this role until the latter part of the story” (Hopkins 76).
5. “the author’s subjective stance is not part of his verbal meaning even when he explicitly discusses his feelings and attitudes” (241); “[the textual meaning] must be represented by and limited by the text alone” (242).
6. “Despite Gaskell’s claim after publication that ‘John Barton’ was the original title, the original names [“A Manchester Love Story” and “A Tale of Manchester Life”] suggest that Mary’s love was, along with Manchester life, always central to her design” (73).

Works Cited

- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Daly, Macdonald. Introduction. *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. By Elizabeth Gaskell. Harmondsworth: Penguin, 1996. vii-xxx.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2nd ed. Oxford: Blackwell, 1996.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.
- Hopkins, Annette B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. London: John Lehmann, 1952.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. Ed. Edgar Wright. The World’s Classics. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . *Ruth*. Ed. Alan Shelston. Oxford: Oxford UP, 1985.
- . *North and South*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1982.
- Kroeber, Karl. *Styles in Fictional Structure: The Art of Jane Austen, Charlotte Brontë, George Eliot*. Princeton: Princeton UP, 1971.
- Nord, Deborah Epstein. *Walking the Victorian Streets: Women, Representation, and the City*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Sanger, Charles Percy. “The Structure of *Wuthering Heights*.” 1926. Rpt. in *Wuthering Heights*. By Emily Brontë. Norton Critical Edition. 2nd ed. New York: Norton, 1972. 286-98.